

日本赤十字看護大学図書館

勢田 玲生

抄録：日本赤十字看護大学図書館（広尾館・武蔵野館）は、学外からの需要が高く文献複写依頼も多い。収集方針として主に教育・研究に役立つ資料を対象としているため、大学院博士論文の引用文献の蔵書評価を行うと74.7%の文献を所蔵していた。この所蔵率を1図書館で高めることは難しく他機関との連携が必要であるため現在、日本赤十字社医療センター図書室との共同事業「Lib-Cross：りぶくろす」を行っており、無料貸出の実現や蔵書の相互利用の強化を目標としている。また、2010年7月にホームページのリニューアルを行った。要望を取り入れ、情報の更新は迅速に内容を増やして行くよう努力したい。

Key word：日本赤十字看護大学図書館、蔵書評価、日本赤十字社医療センター図書室、Lib-Cross：りぶくろす、ホームページリニューアル

I. はじめに

広尾駅から徒歩10分、広尾ガーデンヒルズの緑を抜けると、新築の日本赤十字社医療センター（以下医療センター）の隣に日本赤十字看護大学（以下看護大）はある。このたび日本赤十字学園紹介として、誌面を頂いた。大きく分けて日本赤十字看護大学図書館（以下図書館）の概要と病院図書室との連携という2つの現状をお伝えしたい。



図1 日本赤十字看護大学

II. 日本赤十字看護大学図書館の概要

図書館は、広尾キャンパスにある広尾館と武蔵野キャンパスにある武蔵野館の2館から成り立つ。まず簡単に両大学および図書館の歴史を振り返る（図1、2）。



図2 テニスコート（看護大敷地）

SETA Tamaki

日本赤十字看護大学図書館

tamaki-seta@redcross.ac.jp

1. 日本赤十字看護大学

看護大の歴史は、1890年（明治23年）に開始された日本赤十字社病院における日本赤十字社救護看護婦養成所を前身としている。1954年に開学した日本赤十字女子短期大学看護学科を経て、1986年に4年制大学となった¹⁾。2005年に日本赤十字武蔵野短期大学との統合を行った。また大学院については、1993年に大学院看護学研究科が認可され、日本赤十字学園初の修士課程が設置された。そして、その完成年次である1995年に博士課程が設置された。早期の大学院設置のため国内の看護系大学の中で看護教育の先駆的役割を果たしてきた。

教育理念は、世界のあらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護を通して赤十字の理念である「人道を（Humanity）」を実現しようと努力する人間を育てることである²⁾。図書館は、大学院設置や日本ではまだ少数の助産師課程の大学院の教育・研究に應えるため、研究図書館としての性質を強く持っている。また大学統合により図書館の規模は国内看護図書館として最大規模である。以下に図書館の機能に欠くことのできない武蔵野館を含めた日本赤十字武蔵野短期大学について、その歴史と役割を簡単に述べる。

2. 日本赤十字武蔵野短期大学

日本赤十字武蔵野短期大学の歴史は、1952年に日本赤十字社東京都支部の事業として創立された武蔵野赤十字高等看護学院を前身としている。さらに、1966年には日本赤十字武蔵野女子短期大学に改組した。また、1957年に設立された武蔵野赤十字助産婦学校を1973年に短大専攻科助産学として開設した。これは全国的に助産婦の大学教育化へ進む先駆けとなった。1994年に看護学科定員を40名から80名に増員し、日本赤十字武蔵野短期大学と校名変更し、30名の地域

看護学専攻科を開設した。さらに4年制大学への改組を目指し、2005年4月に看護大と統合した^{3,4)}。図書館は、独立した日本赤十字武蔵野短期大学図書館として蔵書は充実しており、看護大の新1年生教育の場として、教育を支援してきた。2010年学部1年生の広尾キャンパスへの移動により、現在は認定看護師コース受け入れ施設としてその役割を果たしている。また看護実習時の資料提供や、隣接の武蔵野赤十字病院にも利用サービスを提供し、現在の大学図書館の外部公開や地域貢献をいち早く提供する進歩的な図書館でもあった。設置当初より看護および赤十字の国内刊行資料を網羅的に収集することを目的として、報告書・会議録・闘病記に対しての資料も多い⁵⁾。

III. 日本赤十字看護大学図書館の現状

図書館所蔵総数は、図書135,909冊、視聴覚資料3,333点、雑誌タイトル490誌である⁶⁾。平成21年度図書館の資料費は、図書費（視聴覚資料を含む）11,338,514円、雑誌費（追録・新聞含）14,115,637円、計25,454,151円、データベース利用料2,057,226円であった。平成21年度は図書予算の66%を各領域に配分、34%をレファレンス・ブック、継続購入図書、雑誌製本費および学生からのリクエスト用として図書館で選書を行った。表1に平成21年度の図書受入資料数（購入・寄贈・雑収入）を示した（表1）。

図書館の規模については、広尾館総面積1096.8㎡である。2006年9月に旧館より移転。地下一階に位置するが平成19年度植栽が整備され、サンクンガーデンが完成し明るい環境となった。また、武蔵野館総面積431.7㎡である（図3）。

2007年には国際保健助産専攻科課程が開

設され、広尾館利用の大学院生が増加した(表2)。

表1 平成21年度の図書受入資料数

		和雑誌	洋雑誌	合計
図書資料	図書	2,178	209	2,387
	製本雑誌	465	236	701
	計	2,643	445	3,088
視聴覚資料	VHS	1	0	23
	DVD	82	1	35
	計	83	1	58

表2 開館日数・入館者数

	広尾館
開館日数	257 日
入館者数	52,922 人

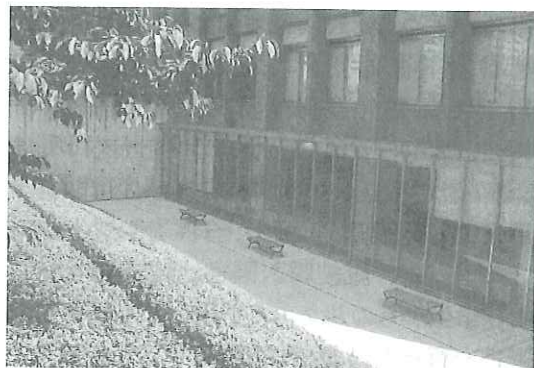


図3 日本赤十字看護大学図書館

利用者は広尾館・武蔵野館の両館を利用することができるため、貸出冊数は2館の合計を算出している。表3に示すように、大学院生の貸出冊数が多いのは、学部生の貸出冊数の上限が7冊に対し12冊の上限のためと考えられる(表3)。

表3 貸出冊数

広尾館・武蔵野館	貸出し冊数
学部生	7,032
大学院生	7,518
認定研修生	613
短大生	0
教職員	2,055
学外	1,057
計	18,275

(冊数)

閲覧室の座席数は広尾館において121席、グループ学習室3室(各6名)、AVルーム2室(各4席)、AVブース5席また、武蔵野館は閲覧席65席、AVブース3席を設けている。情報検索設備や視聴覚機器の配備について、広尾館は検索用PC8台、プリペイドカード複写機3台、VHS/DVDプレーヤー7台であり、武蔵野館は検索用PC5台、プリンタ1台、プリペイドカード式複写機1台、VHS/DVDプレーヤー2台である。

国立情報学研究所の相互貸借システム、NACSIS-ILLは両館で利用している。文献複写依頼は、表4のように受付件数が依頼件数を上回っている。看護図書が充実しており外部からの需要が高いことがうかがわれる(表4)。

表4 文献相互貸借件数

	広尾館	
受付件数	1,660	
依頼件数	744	(件数)

データベースは学内でのみで提供している。表5に種類アクセス数を示す(表5)。

表5 データベースの種類と同時アクセス数

データベース名	アクセス数
医学中央雑誌Web	12
JDream II	12
CINAHL Plus with Full Text	4
Cochrane Library	無制限
CiNii	無制限

(件数)

資料収集方針は、教育・研究に役立つ内外の資料収集を基本としている。以下、図書館規定より図書館の資料収集および除籍に関する細則（改定は2008年4月1日から施行）からの抜粋を掲載する。

第3条 看護関連領域の国内刊行物は体系的に収集する。

- 2 看護関連領域の洋書は選択的に収集する。
- 3 赤十字に関する国内刊行資料は網羅的に収集する。
- 4 学習用基本図書は積極的に収集する。
- 5 本学にかかわる資料は網羅的に収集する。
- 6 本学教職員執筆資料は積極的に収集する⁷⁾。

看護に関わる資料を体系的・網羅的に収集する図書館は、研究を支える側面が強い。対象は大学院とりわけ博士課程の学生とし、博士論文執筆に必要とする文献が図書館においてどれだけ充足されているかを調べた⁸⁾。方法は、引用された文献の図書館蔵書を調べ、引用頻度の高い文献を知る方法である引用文献分析法を用いた。研究ニーズによる蔵書評価方法として有効とされている^{9,10)}。対象は1997年から2008年までに提出された博士論文38編（課程外を含む）に引用された4,359件の文献である。所蔵率、質的・量的研究による所蔵率の差異、そして領域（基礎、小児など）別傾向、種類（和洋図書、和洋雑誌

など）別傾向、分野（医学・教育・基礎科学など）別傾向、出版年別傾向を分析した。

結果は対象文献4,359文献のうち3,254文献（74.7%）を本学図書館が所蔵していた。これは先行研究による他分野（医学・理工学・社会科学など）での所蔵率^{11,12)}に比べてほぼ同程度であった。博士論文を量的研究（9件）と質的研究（29件）に分けて所蔵率を比較すると有意水準5%で差異はなかった。領域別にみると「小児看護学」と「母性看護学」で81.6%と81.8%と高く、「基礎看護学」で最も低く71.6%であった。資料別傾向を調べると、和雑誌の引用が最も多く、全体の34.9%を占め、洋図書が最も低く6.8%であった。所蔵率は和雑誌で最も高く84.1%であり、洋図書は最も低く46.1%であった。分野別傾向では看護分野の雑誌が多く引用されていた。所蔵率は、看護学では全種別において充実していることがわかったが、洋図書・洋雑誌においては医学・教育・社会科学・心理学・自然科学などの分野で低い傾向にあることがわかった。年代別分析によると、博士論文提出年から5～6年ほど前の出版年の文献が全体の50%を占め、約80%はおよそ16年前までの文献であることがわかった。引用頻度の高い雑誌は和雑誌『看護研究』『看護』『看護学雑誌』『看護教育』『看護技術』『日本看護学会集録』で先行研究と同じく利用が多く、本研究では新たに『日本看護科学会誌』『精神科看護』引用が多く見られた。洋雑誌は『Advanced in Nursing Science』『Journal of Advanced Nursing』『Nursing Research』が先行研究^{13,14)}と同じく引用が多く見受けられた。博士論文執筆において必要とされる論文の所蔵率は医学・理工学などの他分野^{11,12)}とほぼ同等であった。しかし領域間の差異は大きかった。これは幅広い分野（教育・哲学から医学・看護学まで）を扱っていることが

要因であると考えられる。様々な資料を1図書館で補うことは難しく他機関との連携が必要であると考えられる。次章からは病院図書室との連携について、本学図書館と医療センター図書室との関係を交えて説明したい。

IV. 病院図書室との連携「Lib-Cross」

「Lib-Cross : りぶくろす」とは、図書館と医療センター図書室との共同事業の愛称である。日本赤十字社が推進している“もっとクロス運動”の一環にもなることから、Library同士のクロスということで、2009年“Lib-Cross : りぶくろす”と命名した。医療センターが新病院に移転し、距離もますます近くなったことから、物理的側面と機能的側面においても協力体制を整え、共同プロジェクトを展開していくことを目指している。

具体的にまだ始まったばかりの共同事業の内容は以下の通りである。

- ・データベース講習会の共同開催。
- ・蔵書の相互利用。医療センターは医学を、看護大は看護を中心に提供。
- ・データベース利用案内（パスファインダー）の共同作成・共同利用（図4）。



図4 看護大コーナー（医療センター）

現在、看護大の学生・教職員が医療センター図書室を利用しようとする、電子ジャーナル・ブックやデータベースは自由に利用ができ、PCからのプリントアウトや資料の貸出は無料である。それに対し医療センター職員が看護大を利用しようとする、電子ジャーナルやデータベースを自由に利用できるが、PCからの印刷はできず、貸出しは有料となっている。看護大での利用環境の整備に努め、対象とする利用者は異なるがお互いに利便性を高め合えるような共同関係になればと考えている。

実現するよう努力している項目は以下のようになる。

- ・医療センター職員に対する看護大図書館所蔵資料の無料貸出しの実現。
- ・蔵書の相互利用の強化。

現在、看護大では学内者へのサービスを優先とし、学外者の貸出し手続きに、登録料を頂いている（年間3,000円、更新2,000円）。日本では図書館法により公立図書館（公立の公共図書館）は利用に代価を徴収することを禁じられているが私立図書館（私立の公共図書館）はその限りではなく、法律の規定の上では利用料を設定することも可能である。しかし、図書館で料金を徴収することは歓迎すべきことではない。利用者の便宜と内外の調整をはかり、より良いサービスにつながるよう努力したいと思う。蔵書の相互利用の強化については、看護大にとって所蔵の不十分である医学分野の資料をカバーし、看護大が広く収集している看護分野の資料の医療センター側からの利用が見込まれる。始まったばかりであるが互いの違う教育・研究環境を理解し、図書館の利用環境の整備・改善を行い、利用者サービスにつなげていくことを願う。

V. ホームページリニューアルについて

2010年7月1日図書館も含めた新しい大学ホームページ（以下HP）の一斉公開を行った。2005年以降、大学全体のHP見直し作業は行われてこなかった。全面公開の期日決定が2009年4月であったため、見直し期間が短かった。しかし図書館はこの機に全面リニューアルを目標とした。まず、現状のHP見直し作業、具体的には客観的評価と主観的評価を行った。客観的評価には、大学図書館トップページのガイドライン^{15,16)}を用い、現状のHPの評価を行った。さらに主観的評価は、筆者も含めた職員による、現状のHPに対する改善点や他大学・機関などの優れたHPについて意見を広く求めた。

現状評価を行い、客観的には学外者への情報が弱いこと。主観的には、学外者に対する情報がわかりづらい、Online Public Access Catalogue (OPAC : オンライン蔵書目録) が探しづらい等の意見が出された。現状評価をふまえ、リニューアル案の作成に取りかかった。原案の作成には簡易なMicrosoft社のPower Pointを用いた。レイアウトやURLリンク機能などをそなえているので、予算が限られた中ではHP作成に適当であった。図書館職員間に情報処理技術の差があるため、HP更新作業は簡易化が求められた。旧HPの構成では8ページを要していた（図5）。今回のリニューアルでは内容を「図書館TOPページ（図6）」、「情報検索ページ（図7）」「学外の皆様へ（図8）」「お問い合わせ（図9）」の4ページの簡潔な構成とした。HPリニューアルに伴い、新たに加えたコンテンツは蔵書検索OPAC、開館カレンダー、My Library機能の明確な表示である。以前のHPでは項目ごとにアイコンをクリックしなければ検索やカレンダーの閲覧、My Libraryへのログインができなかった。情報検索ページでは、データ

ベースをアイコンで表示させ機能を集中させた。新たに設けた「学外の皆様へ」には、直接来館希望の学外者と、Interlibrary Loan (ILL : 図書館間の資料相互利用) の問い合わせや図書館資料についての取り扱いなどを集中させた。HPリニューアルまでの修正作業は、業者とのやりとりを繰り返したが、HP公開以降の修正・追加作業は完全に図書館側が行うこととなった。修正はAdobe社のContributeを用いている。操作が簡単で特別な知識を必要としないため便利である。修正公開作業は、あくまで承認者の確認を得て更新作業を行う。



図5 旧図書館ホームページ



図6 図書館TOPページ



図 7 情報検索ページ



図 8 学外の皆様へ



図 9 お問い合わせ

本来ならば、旧HPと新HPを並列して利用できるように移行期間を設けて、利用者からの意見、職員による使い勝手の評判、学外からの問い合わせ状況を考慮して、修正を重ね、正式にHPリニューアル公開を行うのが

理想である。しかし時間と予算が限られた中で、今回の公開は、利用者にとってみればある日突然HPが変わっていたという状況になってしまった。事前の周知・利用案内ができなかった分、新しいHPへの要望を取り入れ、HP利用方法の伝達に力を注ぎ、コンテンツを増やして、情報の更新は迅速に行うよう努力していきたい。

参考文献

- 1) 日本赤十字看護大学. 大学案内 歴史. [引用 2010.8.27]. <http://www.redcross.ac.jp/about/history.html>
- 2) 日本赤十字看護大学. 大学案内 教育理念・目的・目標. [引用 2010.8.27]. <http://www.redcross.ac.jp/about/idea.html>
- 3) 日本赤十字看護大学. (旧) 日本赤十字武蔵野短期大学. [引用 2010-01-20]. <http://www.redcross.ac.jp/juniorcollege/index.html>
- 4) 日本赤十字武蔵野短期大学閉学記念誌編集委員会. 武蔵野短期大学. 日本赤十字武蔵野短期大学閉学記念誌：未来への飛翔. 東京：2008. p.208.
- 5) 高橋あき子：日本赤十字看護大学と日本赤十字武蔵野短期大学の統合報告. 看護と情報 2007 ; 14 : 79-84.
- 6) 日本赤十字看護大学. 日本赤十字看護大学2009年度年報. 東京：2009. p.300.
- 7) 日本赤十字看護大学. 第5章図書館. 日本赤十字看護大学諸規定集2007. 東京：2007. p.5-1.
- 8) 勢田玲生：引用文献分析による蔵書評価：日本赤十字看護大学図書館の事例. 慶應義塾大学文学部図書館情報学科修士論文. 2009. p.10-40.
- 9) 河合弘志編. 5. 蔵書評価. 蔵書構成と図書選択. 新版. 東京：日本図書館協会；

1998. 283.
- 10) 岸田和明. 第1章 蔵書評価とその方法. 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課編集: 蔵書評価に関する調査研究. 東京: 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課; 2006. p.160.
 - 11) 関川雅彦: 引用文献分析による図書館の評価. 医学図書館 1981; ; 28(2) : 100-105.
 - 12) 気谷陽子: 博士論文引用分析を用いた博士課程大学院生の文献利用についての研究 筑波大学の事例. 大学図書館研究 2002 ; 66 : 33-41.
 - 13) 松本直子、野坂美恵子: 引用分析からみた看護学雑誌: 看護コアジャーナル選定への一考察. 看護と情報 1994 ; 1 : 80-88.
 - 14) 松本直子、野坂美恵子: 引用分析からみた看護学雑誌Ⅱ: 外国雑誌の利用動向. 看護と情報 1995 ; 2 : 22-29.
 - 15) 佐藤千春、森嶋桃子、佐藤普巨他: 大学図書館トップページのガイドライン 大学図書館研究 2004 ; 72 : 1-9.